

審査の結果の要旨

氏名 野澤 光

野澤氏の論文は、書家が先人の書を書き写す「臨書」行為に着目し、書道熟達者 1 名が臨書作品を作り上げる時系列過程を、ニコライ・ベルンシュタインの行為理論を援用しつつ、書家の動作解析、文字の形態解析、インタビューから得られたテキストの計量解析を通して明らかにすることを目的とした事例研究である。

論文は 8 つの章から構成されている。第 1 章では、熟達した芸術家の作品制作プロセスを作品完成に至るまでの時系列変化として記述し、制作における動的・探索的側面を明らかにするという、本論文の基本的な研究手法が解説されている。

第 2 章では、文字痕跡に含まれた他者の運筆を、自己の運筆に反映する臨書行為が、書家の表現構築にとって不可欠な過程と見做されてきたことが、日本および中国の書道史文献を引用しつつ確認されている。

第 3 章では、比較的短期間のうちに集中的に課題に取り組む行為者の振る舞いを詳細に記述するマイクロジェネティク法を用いたダンス創作研究、視線計測を用いた描画研究、さらには行為の柔軟性に注目した動作解析研究など、様々な先行研究の手法を組み合わせることを通して、臨書行為を具体的に記述・解析する手法が提示されている。また、ベルンシュタインの行為理論を援用し、動作の目的に直接関わる先導レベルから、その運動を下支えする背景レベルまで、階層的に構築された身体技能として、芸術的行為を理解しうることが示されている。

第 4 章では、書道熟達者 1 名が合計約 6 時間を費やして、6 世紀北魏の碑文『鄭義下碑』から 17 文字を抜き出した臨書作品 16 枚を制作する実験の詳細が示され、第 5 章から第 6 章では、実験で取得した、画像データ、インタビューデータ、運動データの解析が行われている。第 5 章では、臨書の画像解析と、半構造化インタビューの計量テキスト解析が行われた。画像解析とテキスト解析の結果は、共通して、16 試行の中で文字の形態・配置に関わる複数の変数間

の共変関係を階層的に探索していたことを示していた。このとき試行間において、用紙内における各文字の空間配置には紙面内の位置に依存した時系列変動が認められ、文字の縦横比は継続的に変化し、時に見本から離れる方向に調整されていることが明らかになった。このことは、臨書における文字の形が、見本となる書の形に加えて、紙面という環境の制約/資源を利用しつつ造り上げられていることを示唆している。第 6 章では、書字姿勢と、視線探索の解析が行われた。この際、臨書の際に書家が自ら書いている字と見本とを見比べる頭部回旋動作に着目すると、筆先が紙に触れて字画を描画している最中においても頻回の頭部旋回が生起していたことが明らかになった。筆先から滲み出る墨汁の痕跡としての書画は、字画の終点までの一連の筆勢に制約されるがゆえに、字画描画中に筆先から眼を離すことは円滑な運筆を妨げる外乱になりうるものである。それにもかかわらず書字動作の遂行中に両者を繰り返し見比べているという本知見は、書字行為の最中に浮かび上がる臨書のための資源が存在することを示唆している。第 7 章では、多角的な解析結果をあらためて統合し、身体と環境をつなぎつつ先人の書を身体化し継承するという臨書の特性が示された。また、16 試行を通じた作品制作のダイナミクスの議論からは、環境の制約を能動的に探索して、作品を完成にみちびく、書家の制作プロセスが明らかになった。第 8 章ではさらに、実験参加者と、明治期の書家の書字姿勢の文献記録を比較した結果、文字のかたちという制約を介して、両者の制御方略が一定の共通したパターンに収束するとともに、この書字姿勢が、それぞれの個体の発達させた技能の中に埋め込まれたかたちで、身体化され継承されていることが示唆された。

審査委員からは、本論文は 1 名の書家を対象とした事例研究であることから、得られた知見について、対象となる書家独自の特性と熟達書家一般の特性を今後の研究において区別していく必要性が指摘された。その一方で、本論文が具体的な身体の振る舞いを高い時間解像度で記述することによって、熟達者の作品制作方略を抽出することに成功したことが高く評価され、特に書家自身が意識せずに行っていた、文字形態の積極的な変容過程を明らかにしたことは、事例研究でなければ得られない貴重な知見であると評価された。指導者の手本を通して技能を学ぶことは、書道に限らず、音楽演奏、伝統技能、スポーツなど幅広い身体技能学習において認められるが、書道の「形臨」という文字形態を厳密に模倣する行為が、実際には、見本の文字形態を資源として利用して、独自の作品を作り上げていく、動的な知覚-行為サイクルの過程であることを明らかにした知見は、今後の技能研究一般に対して、深い問題提起を含んだ示唆を与える、オリジナルな成果であると言える。よって、本論文は博士（学際情報学）の学位請求論文として合格と認められる。